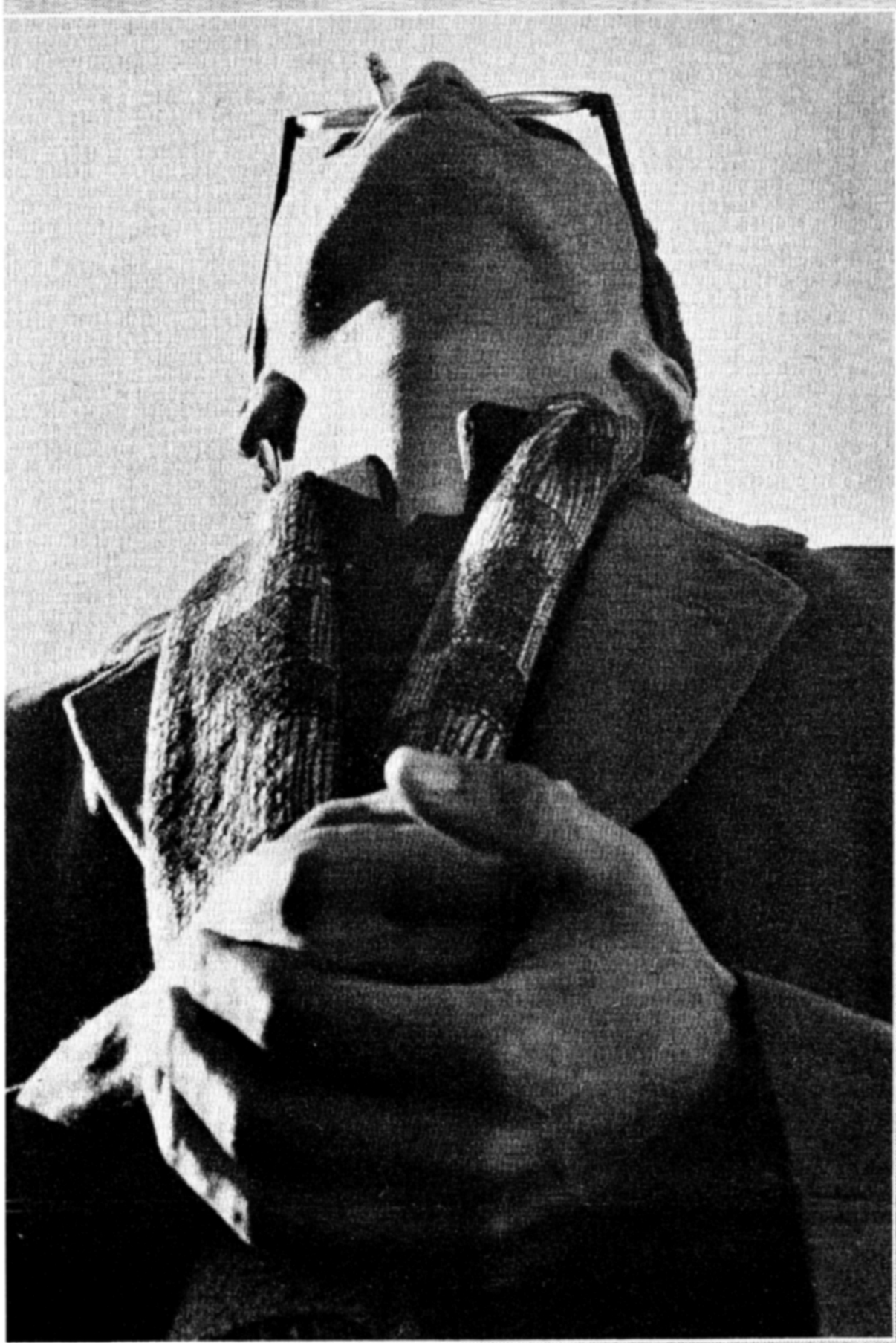
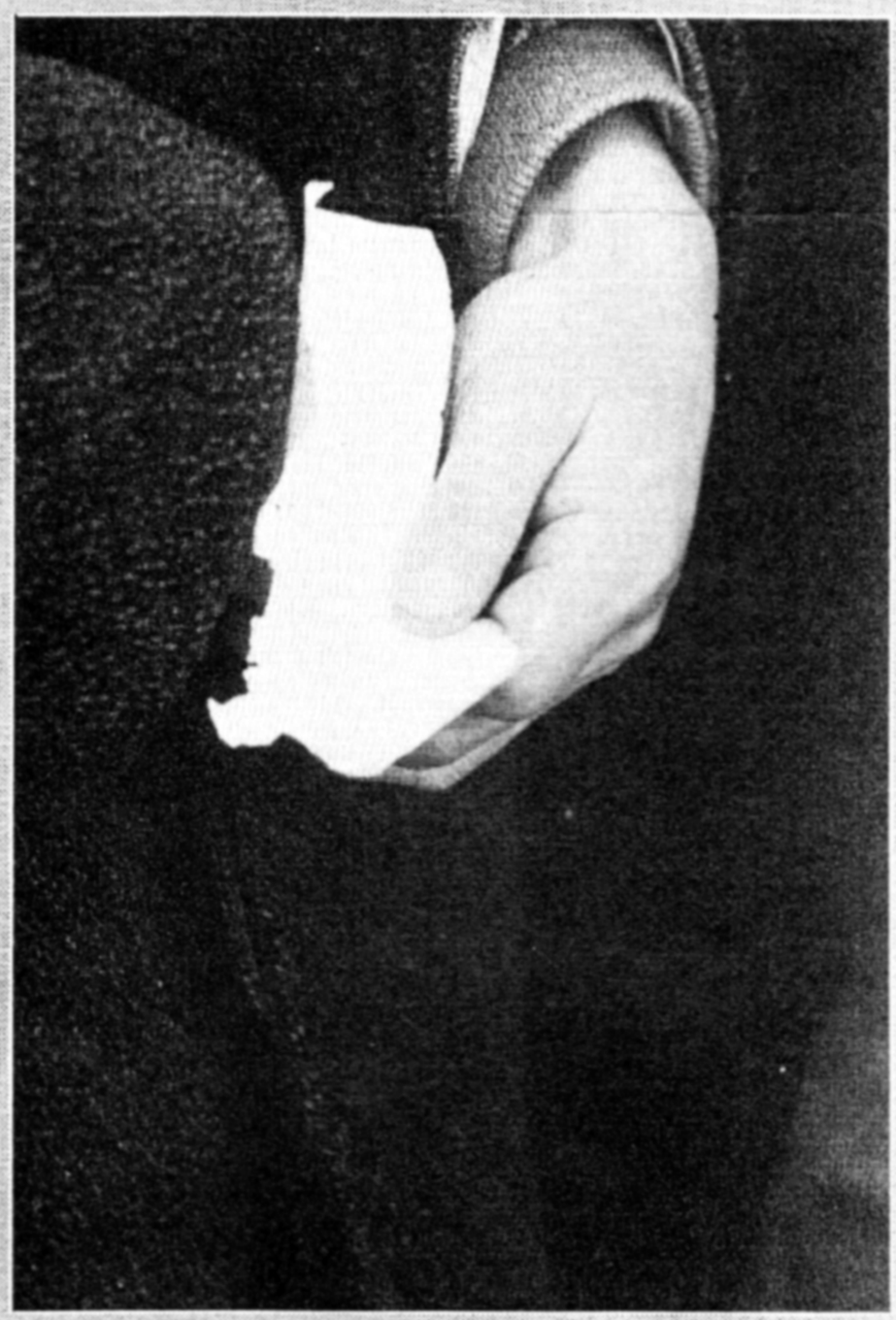
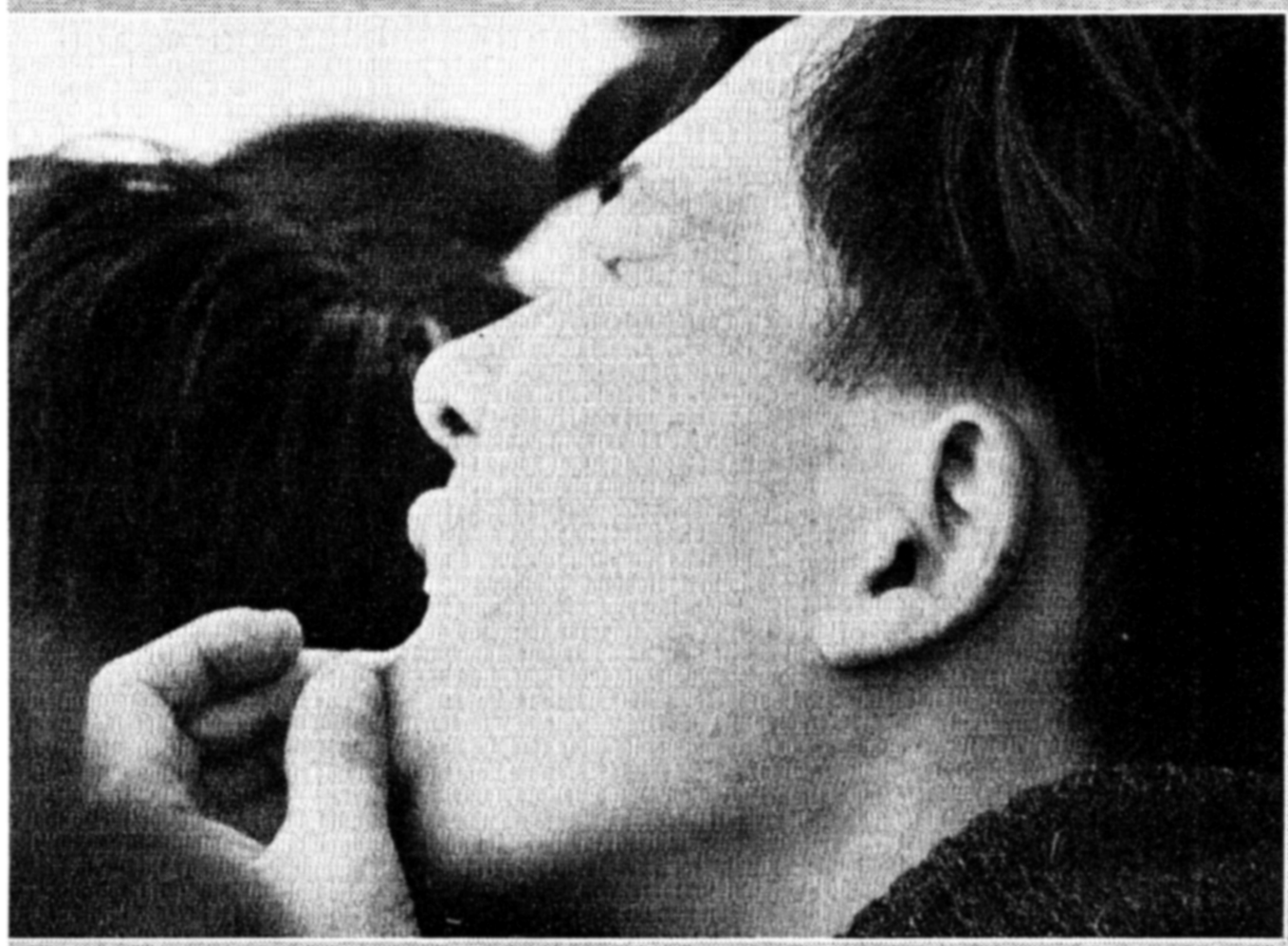
Young Eyes 52

全日本学生写真連盟会報

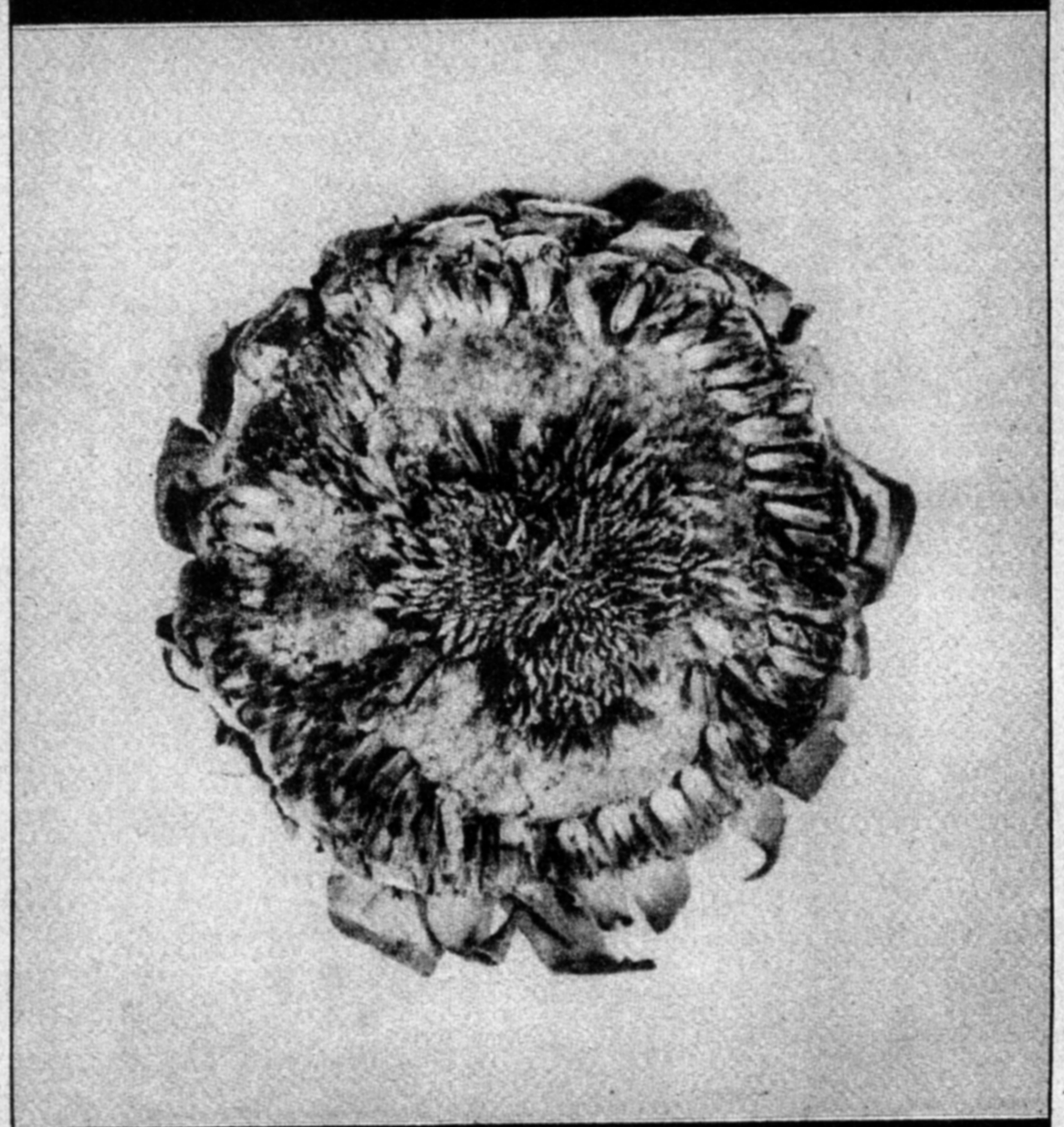






全日コン組写真・銀賞

無い名前 より



’65の方針

写真は様々な手段を用いることによって、様々な思想（ものごとの考え方）を表現できます。又、写真は様々な思想の表現の必要から、様々な手段を産み出す。そして、世の中の様々な問題を解き明かすことができます。それを私達は、いつも心にとめておかなければならないと思います。

その事を実践するために、全日という組織は、

イ. 全日カメラキャンペーンの実質的“キャンペーン（運動）”化

ロ. 各地区連盟の企画充実化

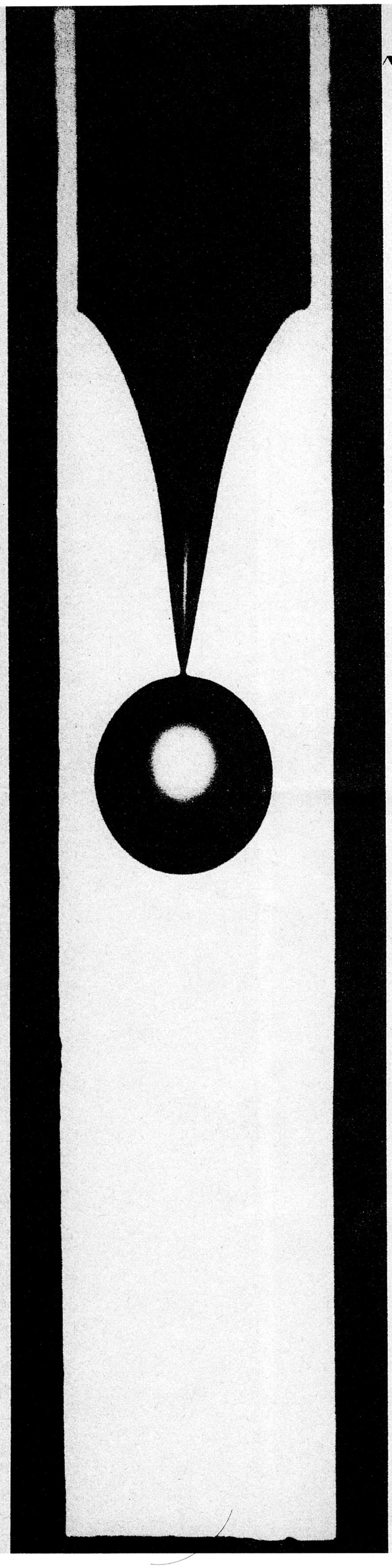
ハ. 会報記事の一般会員への開放

ニ. 全日本部と各地区連盟との連絡の緊密化

ホ. 組織の徹底的整備

を行いたいと思います。

全日本部代表委員会



全日コンを振返って

前全日委員長　津　田　一　郎

全日本学生写真コンクールも、今年で12回目を迎える事になりますが、過去3回の全日コンを振返り感じた事等、特に印象のまだ深い第11回を中心に考えてみたいと思います。

◆新しい可能性を目指せ◆

写真そのものについて考えれば、学生写真と一般の写真とを区別する何物も存在しないが、同時に全く異った意見で、私達の非常に若い活発な頭から作り出される写真が、伸び伸びとしたものであり、冒険に富んだものでありたいと、願うのは写真の好きな者の考えであると思う。全日コンの特色は、若い世代が産み出す何か新しい可能性を目指すものでなければ、全日コンの意義も目的も失われてしまう。最近の学生写真活動が何か平行線の上を歩き続けていると思われる時、私達ひとりびとりが何をしなければならないかと云う事を、全日コンの流れからも拾い上げてみなければならないと思う。

◆もっと素直であれ！◆

小・中学生の部門は、写真そのものが非常に素直で、今回でも組写真の最高賞が、中学生の女子であったと云う事実から、写真の根本は素直な見方、考え方がいかに大切なものであるかが良くわかる。

高校生部門では、自分達の身近な問題を掘り下げた写真が少ない。運動会、修学旅行等は高校時代の楽し

高校生の写真談義

新鮮な感覚と、純粋で素直な感動

竹内　晃
（北海道・深川西高校教諭）

写真を写すということ

営業写真は別として、ひと頃写真と云えば一般の人には仲々近寄り難い特殊技術であり、他から見れば贅沢な暇人の趣味と考えられていたが、今では写真は大衆の手中にあり日常の茶飯事のように生活に密着している。国産品が充分満足出来るものとなって万事がインスタントな今日此の頃であって見れば、被写体にレンズを向けてシャッターを押すだけで他は凡べて他人任せで写真が出来るということは、写真は作るものでなく、シャッターを押して買う商品であるかのように考えられ、古いアマチュアカメラマンには感慨無量というところに違いない。

人に始まって人に終ると云っても過言でない写真だがその内容は極めて変化に富んでいて、漫然とレンズを向けて頼り無さそうに写す初歩の作品から、自分の意のまゝに被写体を選び、動かし、五感や時には第六感迄働かして、自分の視覚をレンズを通して一葉の写真に写しとる、即ち自分の思想をそこに表現する迄に生長するのには矢張り相当の修業の必要なことは言う迄もない。

ピンボケ、カメラブレ、露光不適当等多くの人は苦い失敗を幾度か重ねながら一歩一歩進歩する。失敗は成功の基というが同じ失敗を繰り返さないという研究的態度は上達への近道である。

更に進んで事前に充分に考え計算された方法と態度で写すことによってこそ、得られた作品に対する愛着や批判や反省が自分のものとして体得され写すことの喜びを知ることになるのではないだろうか。写真の価値を決定するものは写す人の撮影に当っての態度であり事前の心構えである。

意に副わぬ作品の多い中に、時には予期せぬ傑作に偶然恵まれることがある。自分の意志ではなかったわけだがこんな事があると写真の妙味がわかって病みつきになることもある。写真とは多分に偶然性を含みながら、尚且自己の錯覚から自負心を満足させる皮肉な性格をもっているようだ。

写真がリアリズムの権化であった過去から作者の心意作用をリアルに表現し、他に視覚を通じて訴える写真に変って来たように思われるが、これはまた写真表現の広汎さを思わせ更にカラー写真の完成は、絵画とは異なる表現の一手段としての新分野を開発する余地のあることを思わせる。

初期のダゲールの銀板写真がどのような労作になったものであるかを知り現在に到る間の暗箱を負い、感光乳剤を自ら調合し、湿板写真を作った先人を思えば、現在のカメラマンの猛者も必要となろう。撮影に集中出来るよき時代を考えて、作品制作態度の確立を期することこそ、大きな課題と言い得る。

高校生の写真はどうあるべきだろうか

高校生の写真入門の動機は、家庭環境、友人関係、強い興味からといった例が多い。而し直ぐ疎縁になるものも少くない。費用がかゝる、シャッターを押すだけでは意欲が続かない。周囲の環境が必ずしも深入りすることを支持しない。高校生はたゞでさえ消費的な存在であり、進学が控えている為、経費や時間の浪費を許されない厳しい環境にあるこれらが無言の威圧を高校生に与えているのに違いない。だが而し比較的開放された窓口がある。それは記録を主とした写真だ。これならば普段からの準備もさほど要しないし、深入りの心配も余りなく、案外撮影の意欲が湧くし写す対象やそれから受ける感動も新鮮で魅力的だ。又出来た作品の性格が見る人に共通の関心や印象を与えることから、写真としての評価は比較的甘く、その実用性からレジスタンスもなく受け容れられ易い。

校内の生徒の生活をはじめ諸行事、修学旅行や夏休み行事などの記録は、高校生の写真の主流であり、こゝにこそ真に学生らしい写真表現の場があり、材料があると言える。貴重な生長の過程の一駒一駒が生活の周辺に、日々に新しく、生きている。高校生として鋭いレンズを通しての視覚がそこに生かされなければならない。

高校生の新鮮な感覚や、純粋で素直な感動をカメラアイによって、血の通った躍動する意欲に満ちた作品に創り上げるのが望ましい。プロ作家の猿真似や、他のアイデアの借用や擬似芸術作品作りは他に委せよう。

高校生の写真には若さがあり、生命が躍動し希望に溢れ、歓びに満ちたものが好ましい。先ず身の周りに注意深く眼を注ぎ、更に視野を拡げて未来に連なる心の発展を写しとって行こう。写真は自分の心を物語る素朴な言葉であり記録であり文学なのだ。

写真＝サークル＝共同制作

福　島　辰　夫

東　松　毎月のようにどっかのギャラリーで展覧会をやっているが、どうもみんなつまらない。それは一つはいまたいていの大学のクラブは、百人くらいの会員が単位だが、その中のほんの一部の委員が立案する。それを百人の会員が撮影参加するわけです。その百人の人たちは、テーマに対して興味のない人でも部員であるという責任のうえにおいて参加する。オリンピックのように“参加することに意義がある”ということになる。結果としては無気力なものが出てくる。そのメカニズムは上から下へ流れるコミュニケーション、つまり命令という形をとるロート型です。サイフォンのような下から上へ上ってくるコミュニケーションの回路に欠けている。そのために共同制作がマンネリにおちこむ。

——カメラ毎日 '65．1月号
“われら何を写すべきか”

まつりと行事のあけくれ

学生にとっての写真は、いま、大きな転換の時期に立っている

その現状はどうだろうか。

まず、クラブ運営の必要上から、新入生の入部を、やたらとあおりたてる。やがて、沢山の離脱者を出したとしても、主として会費をあつめるのが目的だから、やむを得ない。つぎは、モデルをあつめて、行例の新入生の歓迎と親睦をかねた撮影会。一人のモデルに、約二百人からの人間がむらがって、とても撮影どころではないのだが、参加者さえ多ければよろこんでいるのだから、習慣というものはおそろしい。

例会や、コンテストのばあいだってそうだ。学生たちは、どうして、小学校の運動会のように、一等だの、二等だのと、ひとから順番をつけてもらうことが好きなのだろう。一人一人の人間にとって、自分の写真というものは、まず、かけがえのない、それ自体の価値としてあるもので、他との比較において、しかも、他人がつけた一等や二等という順位によってあるものではないということを、どうして理解しないのであろう。

私はある大学で、一年間にやらなければならない展覧会について話をきいて、おどろいたことがある。この大学では、試験の時期や、休みの帰省のとき、また、委員の交代、新しい年度に対する立案、準備の時期をはずして、実際に、写真の制作にかけられる時間を、やらなければならない展覧会の数で割ってみると、ほとんど一ヶ月たらずの間に、一つの共同制作を仕上げなければならない。どんな、プロフェッショナルな写真家でも、一年に一回、いや二年に一回、展覧会をひらくことですら、異例のできごとであり、異常な努力と、労力を必要とするものなのに、いくらひま人のあつまりだからといってまた、よってたかってやればいいからといって、年中そんな沢山の展覧会をやっていたのでは、第一、写真のための展覧会が、展覧会のための写真になって、内容の低下はさけられない。展覧会を沢山やっていれば、外見は活動的で、派手に見えるし、学校同志の体面や、ＯＢへの恰好ずけもいいだろうが、それでは、大切な写真はどうなるのか。一般に、こうした場合、一つ一つの展覧会に、それ専用のチームをつくり、つまり、いくつ展覧会があっても、その数だけの生産ラインをひいて、徹底した分業システムで応じようとしているようだが、こうしたいくつもの展覧会を、ともかくも恰好づけていくための量産化は、共同制作の内容の低下と、さらに、もっともおそろしい、撮る人間としての、一人一人のサークル員の個の立場の無視という、一般的な風潮をまき起しているのだ。そうでなくても、現在、すくなくとも東京では、展覧会の会場をとることは、ほとんど不可能に近いことなのである。ＯＢに泣きつき、スポンサーにへつらい、卑屈なカケヒキや、やがてはワイロにまでつながりそんな態度で、会場を探さなければならない。そんなことまでして、なぜたくさんの展覧会をかかえこまなければならないのか。しかも、展覧会をするだけの意味も、必然性も、すでに写真そのものかもちあわせないものであるとすれば……

ロボット

全体から切はなされた部分だけを人間におしつけた場

合、人間は本来のトータリティを失って、ただ命令通りに動くロボットになる。それでも手足は動くし、命令に従って対象を見分け、シャッター・ボタンを押す機能は失われないから、共同制作の部品としての写真は、つくり得るし、それを組みたてれば、一まとめの展覧会用組写真もできあがるわけだ。つまり、安あがりの恰好だけはつくことになるが、ここで、写真を撮る、あるいは、一つの制作をまとめあげる際に、きわめて重要な、決定的な要因が、ないがしろにされていることに注意しなければならない。

トータリティを失っても、人間はなお、知覚も、記憶力も、目的に即した対象を識別する能力も失うわけではないから、指定の場所におもむき、それらしき対象を識別して写真にしてくることはできる。しかし、反面、トータリティを失うことによって、人間は同時に、綜合的な判断力も批判力も機能を停止し、思考も、事物の意味の把握も不可能になる。

それでもいい、という人がいるかも知れない。企画し、実施させ、制作の運行をチェックしながら、最後にまとめあげるまでの、頭脳の役割をする部門が存在するかぎり、共同制作という集団活動のトータリティは失われないと考えることも、一応はなりたつし、一見、正しい考え方のようにも見えるからである。註1

しかし、これは間違いである。

もし、この際、手足となって動くものが、人間ではなくて機械（メカニズム）であった場合、たとえばロボットであった場合、この方法は成功するであろう。なぜなら、現実と直面するものは、メカニズムを駆使する人間そのものであり、直接、現実にむかいあっているのは、人間の綜合的な判断力、批判力であり得るからだ。そこでは、人間のトータリティは、すこしもそこなわれることなく、現実の意味をとらえることができるからだ。

これに対して、もし逆に、手足となって動くものが、メカニズムではなくて人間であった場合（これが現行の共同制作の方法論であり、また、写真サークルの組織論、運営論でもある。註2）、この方法は失敗するであろう。なぜなら、ここでは、人間の判断力、批判力は、現実に直面することができず、しかも、現実に直接むかいあう役割の人間（撮影者）には、むしろ機械であることがのぞまれているのだ。もし、人間が、むしろ機械であることをのぞまれた場合、これほど不完全な、できそこないの機械はないであろう。さて、それでは、他人の頭で動く手足と、他人の手足で動く頭脳と、このバラバラ事件の結末はどうなるのだろうか。

ここに一人のサークル員がいたとして、彼が共同制作の撮影スタッフの一人としてどんな行動をするのか、また、その体験の結果として生まれた写真が、どんな形で、共同制作のなかに組入れられ、あるいは切すてられていくか―そのことについて考えてみよう。

註1　事実、人間のいけない場所にカメラをもちこんで、オートマチックに、あるいは遠隔操作によって写真を撮り、その写真によって、新しいヴィジョンをつくりあげることは可能であり、いや、可能であるばかりか、これは現代の、一つの課題でもある。海の底を探るマリンカメラ、胃のなかの状態を知るためのガストロカメラ、地図をつくるための航空写真自動撮影装置…われわれは、月の具体的なヴィジョンを得るために、ロケットや、人工衛星を飛ばすこともできるし、サイバネテックスをつかって、社会現象の、新しいドキュメントを試みることも可能であろう。だから、ロボットをつかっての写真撮影も、また、その写真を組みあわせて、一つのすぐれたヴィジョンの創造を試みることも、もちろん、可能だろう。しかし、人間のかわりにロボットを―ではなしに、ロボットのかわりに人間を―つかう式の共同制作の問題は、こうしたことによって、すこしも解消されるものではない。

註2　現行の共同制作が、現実に直面する、本来の写真の方法論からはなれて行われているように、現行の写真サークルは、写真に直接むかいあうための組織でもなければ運営でもなくなっている。

彼は……

撮影地へいく途中で、彼はもう一度、こんどの共同制作についての説明や、みんなでした質疑応答を思い出してみた。

ほかの共同制作よりも、また去年やったものよりも、こんどの方が、自分にとっても興味がもてるし、うまくいきそうにも思えた。それに、知らない土地へ来て、知らない人間の生活に接することは、いいことだし、欲をいえば、彼はふだん、三脚をたてて、じっくり撮るような撮り方が好きなのだから、今回も、そういうやり方で撮ってもいいというならば、いうことなし、というところだったろう。しかしチーフになった上級生のえらんだモチーフも、手法も、スナップ風のもので、それで統一しなければ、共同制作はなりたたない。サークル員はかならず、どれかの共同制作に参加しなければならないし、参加した以上、最終的にはチーフの考え方にしたがって、与えられた任務をやりつくせばいい―そのくらいのことは彼にもよくわかっていた。チーフだってあんなに熱心に、一枚一枚のコンテから、全体の構成まで、いままでだれもやったことのない緻密さで、びっしりとプランを立てているのだから、自分もその熱意にこたえて、頑張らなければ、という気持は充分すぎるほどあったのである。

ところが事情は一変した。彼は毎日コンテを見なおし、読みかえし、もう出してみる必要のまったくないほど、頭に叩きこんでいたにも拘らず、通っても通っても写真はできなかった。コンテどおりの場所、コンテ通りの状景、コンテどおりの人間の配置―そういうものは、いくらでもあった。だから一応、そのたびに彼はシャッターを切った。しかしいくらシャッターを切っても、彼には手応えがなかった。よろこびもなかった。

そんなはずはない―と、彼はなんども考えてみた。あれほど張切って、こんどの共同制作は、ぜんぶ自分の写

真で埋めてやろう、と熱心に考え、やり切ろうとしていたのに、これはどうしたことか、なぜ手応えがないのか、うつろなのか。コンタクトをいくらみなおしても、そらぞらしい画面が、目白押しに並んでいるばかりだった。

……

そのうち、彼はいつのまにか、別な写真を撮りはじめた。コンテからまったく離れて、彼は彼の眼に、彼の頭に感じられるものを、すべて撮ろうと夢中になった。現実の意味がすこしづつ姿をあらわそうとしているのだった。毎日、やはりコンタクトを見れば、どの写真も、どの写真も、思うようなものはなかった。しかし、それでも、以上のような空々しさ、うつろさはなく、写真は不満足であっても、根柢的な充実感があった。それは行為者としての、おそらくは精神の行為者としての充足であった。それはまだ、微量なもので、春先の凍った小川の底を流れる水のような、細々としたものだったが、間違いなく、これは自由の実態だった。その証拠に、彼のなかでは、異常なほどの抵抗感と、それをつきぬけていこうとする意志と、集中した情熱が、やはり次第に強く大きく形成されつつあったからである。

彼は現実にむかって、まっすぐに歩みこもうとした。はじめて針の穴に糸を通すときのように、やろうとすればするほど彼はいらだち、いらだてばいらだつほど、糸先はくずれて、気をとりなおしては、また出かけるのだが、また、やっぱり、だめであった。技術が、徹底的に技術が必要だったときに、彼には、その技術をつくりだすすべがまったくといっていいほどなかったのである。現実が、ときどき、その実態をあらわにして、すぐそこに、目と鼻の先にあるときにも、彼はそこにいたることが、ほとんど絶望的にできなかった。

……

時間切れが来て、サークルにもどったとき、この彼を待受けていたものは、厳然たるコンテであった。伸しばかりでなく、彼の場合は、コンタクトの全部を提出するように、チーフの側からの要求があった。チーフの方でも、はじめは彼の伸しで、なんとかならないかとさんざん苦労してくれた様子だった。にも拘らず、彼の写真が、ほかの部分を担当した人たちのものと、どうしてもなじまず、それでは、共同制作がなりたたないというのが、コンタクト提出の決定的な理由だった。チーフは困りぬいていた。彼の場合ばかりでなく、ほかにも、そういう例がいくつもあったからであった。彼の方としては、最初の空々しいコンタクトを人に見せることは、非常にいやな気持だったが、まとめようとして困りぬいているチーフにいわれると、やはりノーということは困難だった。それでもはじめは自分の現地で見たものはちがうものであったこと、自分としては、きわめて不満足ではあるが、こういう風にしか撮りようがなかったことなど、チーフにわからせようとしたのだが、チーフも、他の人たちも、決定的なことは、彼が直接現実とむかいあうことによって得た体験を持っていないということだった。とすれば、彼等はあくまでも、最初のプランにしたがい、共同制作を完結させるよりしかたがないではないか。彼が現実に直面することによって変ったのに対して、彼等は現実に直面することがなかったのだから、変りようもないのである。

起　点

写真にとって決定的なことは、現実と向いあった時点においてしか、なりたち得ないという事実である。現実の事務、状態、あるいはそれらの状況をまえにしてしか、なにごともなし得ない。したがってあり得ない。だから、そこが起点であり、また終結点でもあるということなのだ。これに対して、写真をつくる人間はどのように関与するのであろうか。写真が現実をまえにしてしかなりたち得ないとすれば、写真つくる行為（撮る行為も、まとめる行為も）も、徹頭徹尾、その一点に集中されていかなければならない。人間にとってあくまでも、とらえたいものは、現実の、人間にとっての意味であり、写真はだから、現実と人間との接点になりたち、あらわすものは、現実の、あるいは事物の、人間にとっての意味でなければならない。撮影する人間としての「彼」は、まさに写真を撮ろうとした、あるいは、撮ろうとするようになった人間であった。はじめ、彼は手足であった。しかし現実は、人間が手足であることをゆるさない。人間が手足であることも、人間が機械であることも、また、機械が機械であることも、である。どんなに人間が手足であろうと望んでいても、懇願しても、哀訴しても、現実はゴウ然と彼のまえに立ちはだかり、彼をそれなりに取扱っていくであろう。逃げるものと、背をむけるものも、遠まきにしようとするものも、それぞれ、それなりに扱って追いかえすであろう。だから「彼」はすくわれる。問題はむしろ「彼」にではなくて、現実にタッチすることのできない頭脳の部門の人たちであり、個の完結性を断ち切り、また個と写真の有機的な関係を破壊する、現行の共同制作のあり方、考え方にある。単独の個として存在する以上のものを生み出すために集ったはずのサークルが、個のトータリティと、個と写真との正しい関係に、破壊的に作用する組織であり、集団であるかぎり、その組織なり、集団なりは破壊されるべきであろう。いうまでもないことだが、個人の反抗はまったく意味がない。個人の反抗は、どんなにイキがってみても、組織のメカニズムにはじき出されている自分を発見するのがオチだからである。部分的に、悪い場所だけをなおそうとすることも、まったく無駄である。部分的な変革は、本質的な変革に、決してなりえない。現行のサークルのしくみは、実はサークルだけのしくみではなくて、実は今日の社会の、体制のしくみである。だからあなた方は、そこからなかなかぬけ出ることができないのだ。だからこの変革は、ある個人の自己変質をきっかけにはじまり、たえずそれを現実と写真とのかかわりあいのなかでの、個の変革へとつないでいける組織体を構築し得たときにおわる。

そのために必要なものは、すべてドン欲にかきあつめるべきである。

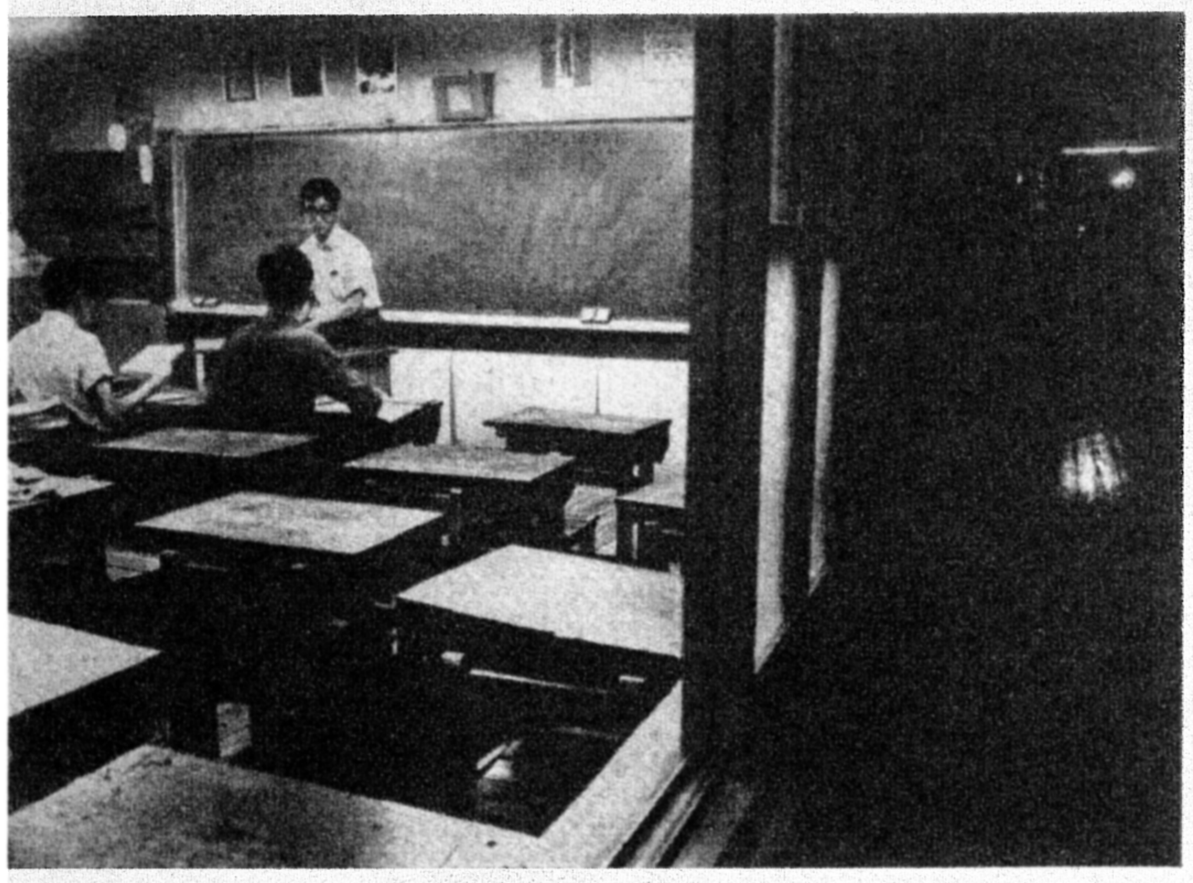
第三回キャンペーンの反省とこれからのキャンペーン

二年越にとりくんで来たカメラキャンペーン、みんなの協力で写真も大半は出揃い、この原稿がみんなの目にふれる頃にはおそらく発表を待つばかりになっていることでしょう。こんな段階で何を書いて良いのか一寸迷うのですが、僕達の経験からすると、第二回キャンペーンが未発表のうちに、第三回のキャンペーンにとりかかったし、今度もそうなるのではないかと思いますので、現段階に於ける反省を主に将来への展望を記して、第四回以降のキャンペーンの足掛りとしてもらえればと思います。

キャンペーンでは第一に、テーマの決定が非常に重要です。成否の半ばがここで決するといっても過言ではないでしょう。従来の押しつけ方式を改め、各地区毎にテーマをもつより全日総会で全国のテーマを決定するという今回のやり方は正しかったと思いますが、なにぶん、総会が急に早くなった為にテーマを決定していたのは関東地区のみというのは残念でした。しかし、「日本の教育」というテーマは決して悪くないと思っています。何故なら、実社会のからっ風にさらされていない僕達が、最も強く主張できる殆ど唯一といって良い問題は教育だからです。教育を我々は身をもって体験して来、現に未だ教育の場に居るのですから。しかも教育は国家の生死を決するほど重要な機能を営んでおり、それだけに権力の手段とも化し易く、ひとつ間違えば国民全体がとんでもない方向に追いやられることは、ペンが剣に屈服していた戦前の例に明らかです。教育に正しい姿勢を保たせるのは重要なことです。現在の受験地獄、大学の就職予備門化が正常でしょうか？規格化された、何に対しても疑問を抱かぬ体制順応型の不器用な人間しかつくり出せない教育と、その谷間にあえぐ非行少年の群。こんな姿は単に現体制に資するのみならず、日本の発展を防げています。その一方では、貧弱な施設に甘んじる僻地の子供や身体障害者、夜間中学生や長欠児童があります。彼らは受験地獄とは無縁な少数者ではありましょう。が、だからといって無視して良いというのでは教育の機会均等を欧った民主憲法が泣きます。このように身近な大切なテーマを選べたことを嬉しく思いますし、それだけに是非とも今回のキャンペーンを成功させたいのです。そしていづれ発表される写真を観る際には、僕達のこのような意図を汲んで観てもらいたいのです。又、できるだけ多くの人に観てもらいたいのです。

第二に、いうまでもなく写真そのものの良否が問題です。これはいつにかかって、全日写連会員の熱意にあるといえましょう。残念ながらこの点、今の状態では関東に関する限り満足できないものがあります。その原因を探ってみますと、個人製作は勿論、学校単位の共同製作とも違ってキャンペーンは、非常に大きな組織を通して行う為に、一見漠然として握みどころがないと同時に、各個人の努力の成果が直ちに現れるということもない点にあるようです。例えば普通の共同製作だと、一寸部員の少ない写真部なら一人が努力するだけで、作品のレベルアップがかなり期待出来ますし、又、そのことが自分の目で直ちに確かめられます。何よりもコンテの作成から引き伸し、パネルづくりに至るまで全て自己が関与します。我が子を手塩にかけて育てるようなもので、自然愛着も湧きましょう。と

ころがキャンペーンは、群盲象をなでるが如く、一体何をやっているのか良く解らない上に、一生懸命撮ったところで、いつどのような形でその写真が目にふれるのか見当もつかないし、そもそも自分の写真が会場の一偶を占める可能性も少ない。更には自分一人がやらなくとも文句はいわれないし、大勢に影響がない。このような意識が支配的なことは事実ですし、こんなムードを打破するのは非常に難しいと思います。究極的には会員各自の自覚を待つほかないでしょうが、地区毎に討論を重ねてテーマやコンテを徹底的に理解し、キャンペーンに興味をもってもらうことが大切でしょう。リーダーだけの先っ走りは厳に慎しむべきです。僕達としては、従来必らずしも全地区でキャンペーンの写真展示が行なわれていなかったことや、展示されても随分後で、忘れかけたりした頃だったことに鑑み、必らず全地区で、出来れば全都道府県で、迅速に展示されるよう、幾度も全日委員に要望してきています。こうしてキャンペーンのスケールの大きさを知ってもらい、少しでも多くの興味と関心をキャンペーンにもってもらいたいのです。又、今年関西地区で試みるように、キャンペーンに関係のテーマを課題作品としてコンテストを行うというのも手取早い一方法です。全



日コンの課題作品として教育を採りあげるように僕達も要求したのですが、残念ながら実現しなかったようです。

以上の二つは、これからのキャンペーンでも常に問題になることでしょうが、今回特に試たいくつかの新しい方法があります。ひとつは、従来の地域別に組むという方法を廃し、全国統一のコンテを考え、レイアウトを行うということ、第二は期間は従来の一年から、二年にのばして、より充実したものを、と考えたことです、この二つは将来も考えていって良いことだとは思いますが、今回に関する限り時期早尚の感を免れませんでした。前者は、何も知らない僕達が、全日本学生写真連盟という組織が、装備された立派なものであるということを前提に考えたもので、実際に全日の組織が充分にワークしていない現状ではいさゝか無理だったようです。為に各地の連絡が必らずしも密でなく、完全に一致した考え方、コンテの下に全員が撮り進めなかったと推測されます。又、地区毎に問題の所在、或は重点が異なる可能性がある為に、テーマの決定を、もしこの方法をとるならば慎重に行う必要があるといえます。後者については、どのクラブも役員をはじめ主力メンバーが一年で交代する為に、途中で実際撮影にあたる者は勿論、リーダーも多く交代した点に問題があるようです。一年間で相当の段階にまで進んでいる為に新たに入って来た人は、何をやっているのかまるで解らず、興味をなくして脱落してゆくというケースが多かったようです。もうひとつ僕達の新しい試みとして上げれば、従来の様にキャンペーンの為に新たに撮った写真に限らず、各大学で既に撮ったことのある写真や全日コンの応募作品の中からも、使えそうな写真を選び出して用いるということです。キャンペーンの内容を充実したものにするという点からいって良い方法だと思います。

前述のように未完成の現段階では反省といっても、あくまで結果を予測しての上のことで、上のようなあいまいなことしか書けません。写真発表の後、若し機会が与えられゝば改めて徹底した反省を行いたいと思います。

尚、撮影は今年の五月いっぱい行う予定ですので、もしこの会報が発行される頃、未だ撮影が続けられていましたら、完成の日の近いことを想って、最後の奮闘をして下さるよう、会員諸氏にお願い申しあげます。

写真
キャンペーン
「教育問題」
夜間学校より

阪田雅裕
(東大写真文化会)

カメラキャンペーンが教えるもの

全日代表委員　小松久信

カメラキャンペーンが教育問題に取り組んで早二年目、今や写真をレイアウトするばかりです。

今回のキャンペーンは僕に、自分の周囲、我々の住んでいる世の中の再確認の好機を与え、問題意識の一端となり、自分自身の経験と目で、ものを知ろうとする意欲をかき立てゝくれました。と同時に、知識の中の観念的部分（自己が経験的と考える中にも存在する）が、いかに弾力性を欲しているかを教えてくれました。又僕達撮影者をも含めた社会に対し“参加しているんだ”“学生写真連盟が取り組んでいるんだ”と云う意識を持たせる事によって、すでにキャンペーンは始められているのです。今年10月西銀座富士フォトサロンに於て、写真展示が行われますが、その時までに我々は、何を学びとれる事だろうか。そして、次回に我々が何に取り組むとも、自分の周囲、社会全体の現状をより正確に把握する為に、個々であれ、サークルであれ、コンテ作成以前にも努力する事が常に必要であり、しかもそれは我々の目的である。思考的人間の形成に他ならないのです。

各地区だより

その1　かんさい

一昨年の総会に於て、大学6支部－40校と高校約120校があったが、春期、秋期コンテスト、撮影会の不参加、その他連絡不履行等の活動を怠った学校を整理し、現在は大学30校－4支部、高校60校へと縮少し、内容充実に踏み切った。大学側は大阪2支部、京都、兵庫各1支部になり、過去1年間、キャンペーン活動を中心として、各支部の内容充実と相互親睦の交流に重点を置いた。一部の支部では、昨年の組織結成と同時に、第1回支部合同写真展、撮影会、支部合同例会等を催し、早くもその成果が出てき、他支部でも、一部の学校が積極的に他校に働きかけ、その活動を煽った。キャンペーン「教育問題」に於ては、各支部組織を利用して広範囲に活動し、新たにキャンペーン委員会を作り、今後のコンテから完成まで委員会独自で、施行される予定である。一方高校側は、従来大学の附属的機関であったけれども、半年の時間をかけて、旧現象に甘んじていたのを、独立と云うもので目のめをみた。その事について高校の代表者は、次の様に述べている。〔関西学写連の高校の活動は、大学に附属していると云うだけで、高校生自身では、低調であった。私達がする事と云えば、春と秋の写真コンクールと春の撮影会だけです。春、秋の総会も大学生中心であり、私達はたゞ結果を見に行く程度です。これでは高校生会員相互の交流は、できないので最近自分達で、やろうと云う者と同時に、大学生の方から独立化の話しがあり、昨年12月高校独立化を受け入れ、自分達の手で活動を始める事にした。そして大阪、兵庫、京都及び奈良の三支部に分けて、活動を始めております。

方針として、写真技術の向上はもちろん、会員相互の親睦と交流に力を入れ、ひとりびとりが独立した事に十分な理解を持って、コンテストだけを目標にするのではなく、行事、会議等にも、今まで以上積極的に参加し、お互いの考え、意見を述べ合う事が、もっとも大切な事と思います。又総会には、高校生の意見をも入れてもらおうと、考えております。独立後、始めての行事として、今年三月に暗室講座を開きましたが、結束されたばかりなので、大学生方の御援助を得て、私達会員ひとりびとりの力で発展させて行こうと思います。〕

それら現状は、決して完成されたものではなく、完成への離陸を目指す先行条件に過ぎない。この過度期にあって、多種多様な問題が解消されなければならない。例えば、組織的には一応完成されたけれども、その内面の統制、拡充を行わなければならないし、キャンペーン撮影参加者がなぜ少いか。事実不参加者は半数もいる。それはしないと云うよりは、出来ないに近い。と云うのは、各部はクラブ中心に行事を組み、行動しているからだ。裏を返せば全日及び連盟意識が、無い事を意味する。或る学校では全日が何であり、如何なる目的を持って活動しているかすら知らない者がいるし、他校では学連委員のみしか活動状況を知る者が、いないと云う現状である。これと共通の問題を持つものに辺地校がある。本部と直接的な結びつきがなく、事務連絡で交流し、実質的に弧立状態に在る。以上が現在の実情であり問題点である。

これら組織及び活動面の“歪み”は、第一に過度期にあると云う事と、第二に組織の不確立性、第三に相互無交流の三点にあると考える。

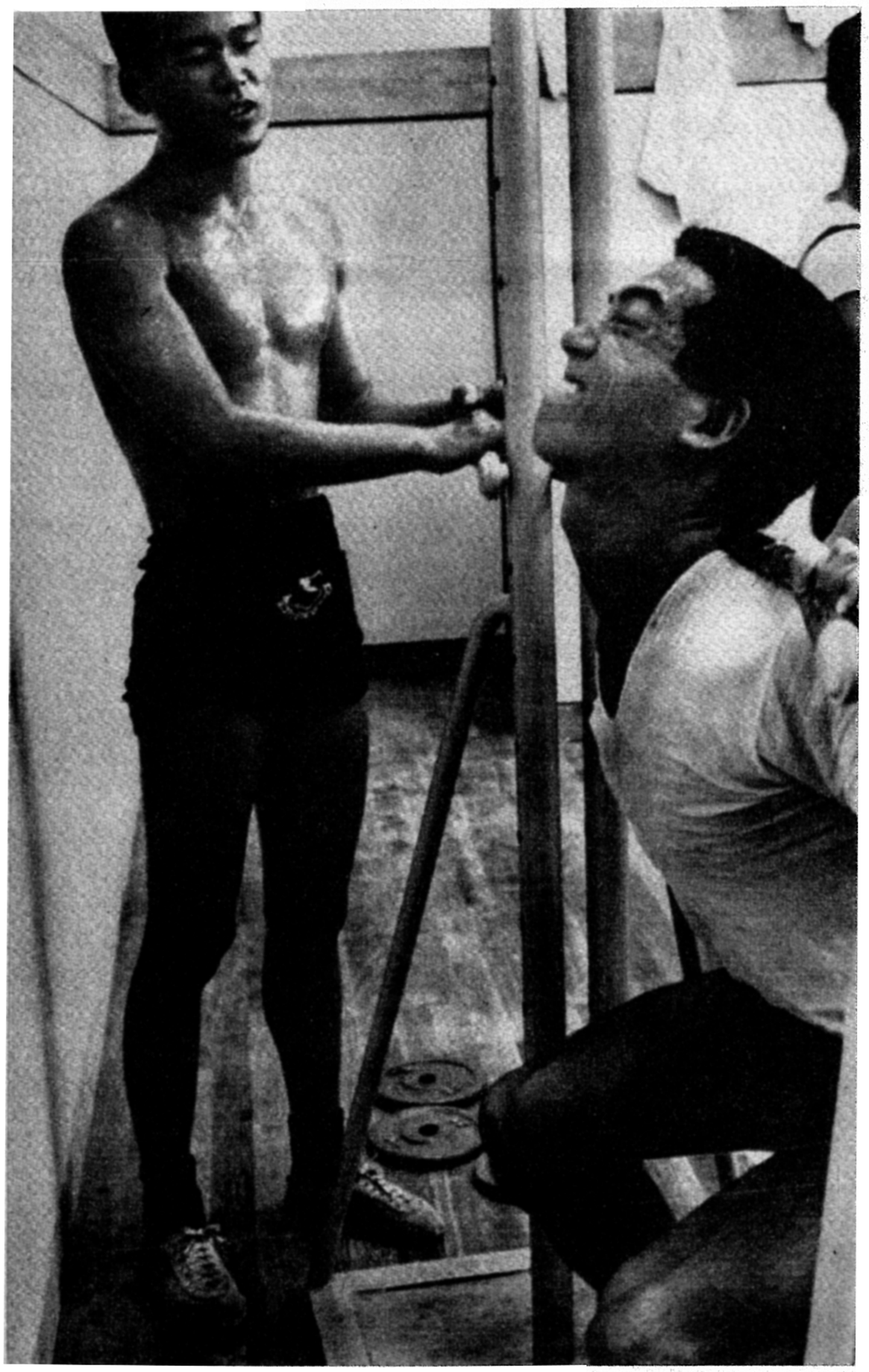
第一の問題は、現在連盟は飛躍の途上にあり、この段階を急速に離陸し、その先行に第二の問題である組織化が上げられる。昨年は支部分けにより支部会が設けられ、支部活動の基礎がなされた。それに伴って代表委員も五名に増員された。今年は更に支部長会議を設け、第三の問題である支部間の相互交流を目標としている。これら問題は、関西独自の意図するものでなく、全日本部にかゝる問題であると考える。そこで当地区は、全日本部の組織確立を目指し、それに沿って関西独自の組織化を目標としている。全日本部の不確立は、他の地区に及ぶ影響が大であり、連絡の未到達は、底辺に流れる全日意識への関心を、意欲的に燃やすと云う課題に支持をきたし、しいては相互交流から来る親睦性が成されなくなる。

連盟では、春と秋に二回コンテストを行い、春は団体を主として学校単位及び個人の組写真、課題写真、カラーを中心に構成され、秋は個人を主とした自由作品を採用している。その目的としては、学生写真は写真屋稼業ではなく、クラブの在り方や共同作業の在り方から来る学びの場であり、他面、民主主義的立場から来る個人の主義、主張及び教養から来る美の発表の場である。学生の為のコンテストである事を根本精神にしている我々は、全てを開放し学生写真の現状を見てもらう事、それに審査に対する認識を深め、正しい写真の見方を学び取ってほしいのである。審査員は5名で形成され、全て関西人であり、前もって各校の要望する人物を頼んで来てもらっている。選出に際しても、作品一点一点に平等な権利を与え、学生立ち合いのもとで審査してもらう。そしてマンネリ化を防ぎ、新鮮味を与えるために将来は、関東方面からも来阪してもらいたく思っている。

マンネリ化を恐れる我々は、進歩的なのか危険性を犯しているのかわからないが、学生であると云う事から、going my wayの精神でいかなければならない。個人の営利、名誉を目的とした活動でなく、純粋に写真を愛し、学生精神に沿った行動を、取らなければならないし、社会のエゴイズムから来る束縛に対抗し、エスプリを大切にしなければならない。単なる学生写真のコンテストであるけれど、学生の真の姿をこゝに表わし、更に連盟の中に居て花も実もあるものとしていくべきで、又それが唯一の道と我々は信じている。

関西学生写真連盟代表委員　**斉　藤　考　一**

学生写真を語る



全日コン大学・銀賞

現在の写真は飛躍的な発達を遂げ、誰れでも自由に簡単に写せるようになった。故にこれまで以上に表現の無限が期待され、新しい視角、感覚の写真の出現を待たれている。それだけに真のアマチュアとして存在する我々は何を撮り、どう表現すべきかの問題である。

現在学生写真について再認識がなされようとし、各種の会合において学生写真とは何を意味し、世の中から何を期待されているか活発な討議がなされている。

今回、私が発言の機会を得たので、私なりの考えを述べてみたいと思う。写真そのものを考えると、学生が撮ったから学生写真であるとか、学生であるからこそ撮影できるのだと、一般に言われる。学生が撮影した作品において、その立場の価値があるとは思えないし、又人は写真を見た時にその人の立場というものを考えないだろう。しかし、学生写真という枠が存在し、又期待されているということも現実である。この点について考えてみることは我々に必要なことだと思う。そして期待に答えるべき努力も必要なことでもある。その期待とは「若さ」の表現に代表されると思う。

「若さ」はあらゆる活動のエネルギーであり、我々の特技でもある。「若さ」をどのようにして表現するかは、各自異論のあるところであろうか、私は問題に対する限りない追求と、誰れにも直接制約を受けない自由な思考にその基点があると思う。若さは精神的、肉体的な無限を有している。それを生かし、我々は問題に体当りし、本当の人間の姿を見る人に深い感銘を訴えるよう努力する必要があると思う。写真は常に問題の追求、それにはスナップを主としたカメラアイの養成に努め、常に写真を撮って歩くことが重要である。最近世の中は合理的に、便利になっただけに、自分を問題の中に入れて苦労を経験するのを事前に避ける傾向にある。写真が人間から出発し人間に帰する以上、我々は常に人々の中にあって、人間同志のぶつかり合いを必要とするのである。素直に人間を表現するという態度を忘れてはなるまい。ただ技術的、表面的な写真に陥ることは慎しむべきである。「若さ」の表現として、我々の身近かな問題に目を向け、それを追求することも要求されている。我々学生生活の問題を捕え追求するのである。このことも学生写真に期待されている一面であるかも知れない。

写真においては、シャッター以前の考察が重要であることは言うまでもない。自分の考えを充分に表現し、理解してもらうのであるから、周到な洞察と思考は不可欠の要素である。問題を事前に考え、撮影し、発達するという一つ一つの過程が我々にとって勉強なのであり、写真によって得るものは形では表われないものである。写真が間接的に我々の「学ぶ」ということに通ずるのであるから、技術的な妙味で一時的に逃げる

ことは好ましいものではなく、もう少し深く入って、卒直なものであって欲しいと思う。ただいたずらに若さに任せる無軌道な撮影態度や我々の立場に甘んずることは決して許されないのである。常に自己の訓練と努力が必要である。写真を通して自分を形成していくのである。

写真はただシャッターを押したから、又、作品が高い評価を得たから、それで良いものではない。いつも自分との戦いであり、他への自己主張の手段である。それだからこそ、シャッター以前に考え分折することが重要なのである。それをせずに偶発的に良い写真は生れないのである。我々は常に考え、それをそのまま表現し発表できるのである。（このことも学生写真の特質であろう。）

写真は自己の主張なくしては良い写真とはいえない。我々は勉学に励み種々の考えを持っている。それをただ技術的にもて遊ぶのではなく、巾広い見識と豊かな感受性とを遺憾なく発揮するべきである。我々が体で問題にぶつかって、体で感じて、初めてその問題の本質に触れ得るのである。そして自分で考え、自分なりの方策を産出することが「若さ」の表現であり我々の特権でもある。我々はできるだけ歩き、そして問題を捕え、屈託のない表現をする必要がある。

現在の写真があまりにも表面的、視覚的なものが多く、そうした潮流に対して、各種の問題に真剣に取り組んでいる人々が多数存在しているにもかかわらず現代の風潮に押し流されている感じである。我々は学生として、てっとり早い栄光を目的として写真を撮るのではなくて、自己の内面的な訓練と自己形成の一過程として存在しなければならないと思う。我々は学生であって、プロの写真家ではない。写真という無限の可能性は世間の注目するところであり、それだけに学生に期待するところも大なるものがあると思う。我々は一時的なごまかしで期待を裏切ってはならないのである。我々は多くの期待の中で自分を見い出し、いかに自分を訓練し鍛えて行くということを真剣に考えてゆかねばならない。学生という枠に入ることもないし、又学生を超越することもない。自分の立場に素直であればそれで良いと思う。自分の立場に素直であるということは自分が問題に対して感じ考えたことをそのまま表現すれば、良いということで、そのことが学生写真の本質であるように思える。

故に、我々は自分に納得の行く、血の通った写真を撮るよう努力する必要があるのではないでしょうか。

佐　藤　昇　輔

（福島大学学芸学部写真部）

学生写真とサークル

われわれは学生である

写真と言うものを根本的、本質的に捕え、心随を追求しようなどと考える時、忽ちにその複雑性のために混乱に陥ってしまう。そこでは芸術性の意味するもの、また写真独自の芸術性や報道的役割等をどのように写真の中に組入れていくかが論議の中心になってくる。写真の持つ意味の総合が、我々のサークルを形成している。ここに於てもやはりその芸術性や報道性、あるいは今後の写真の方向等が話題の大部分を占てしまう。勿論焼付、引伸の話や雑談に費す時間も見逃せない。またそこにサークルとしての結びつきの意義があるのである。こうした中で我々は与えられた課題について話し合う機会を持つことが出来た。今迄は自由にその論争の中心を選んでいたのだが、そういう事を通じて得た自分達独特の写真に対する意義を基礎にして、次に書くような課題について論じたのであるが、それを通して得た自分の意見を記していきたいと思う。

「危険をおかして事件の中に飛び込んだり、高いモデル代を払って撮る事が、学生生活にどれだけ役立っているだろうか？」これについて部員の多くは、写真を撮ろうとする時、自分は学生であるという事を殆ど意識することはないと言う。撮りたいと思ったなら、常識を持って願望を満すべきである。従って、時には危険を犯すことも十分考えられるし、高いモデル代を支払う結果になる事もあるでしょう。しかし我々部員の共通点の一つであるお金の不足ということで、高いモデル料を払ってヌード写真に没頭する事も出来ないですし、学ぶことが生活の中心になっている事が、心をいくら自由にしているつもりでも、写真に自づと学生らしさが表われて来る。自由ではあるけれど、自分の進む方向を見定めようとしたり、なぜ写真に自分の気持が十分に出せないのだろうかと考えたりする事が、結局人間的な成長の一助となると思う。「危険を犯す」

ことや「モデル料が高額すぎる」という理由で撮るものを制約しようとする動きがどこかにあるとすれば、自己のモラルに反しない限り、それを無視しようとする。しかしそうした毅然とした態度を取ろうとする反面、自分達の行動の基準になる価値判断の仕方に於て、風当りの強いものは、避けてしまうという芯の弱い点がある。

「学生でなくては撮れない写真というのではなく学生であるが故に有利な被写体があるはず」その様な被写体のある事は確かです。例えば、クラブ活動を主体にしたもの等、絶好の題材と言える。我々自身その中で喜怒哀楽を感じる身近な対象だからであり、またサークルの団結を母体にした、社会的意義のあるキャンペーン的なもの等がある。これらの被写体は、学生個人で接する対象と、サークルの団結によってものになる被写体の二種に大別出来るように思う。前者の場合、我々は大いに学生であることを生かしている。学生写真の内容を見ればそれが認められるし、その類の写真が各種コンクールに良く出品されている。クラブ活動や授業風景等は、時々見る作品だが、それらの被写体は、我々にはマンネリ化してしまい少しも興味が湧かず、撮る気になれないのが本心である。さて後者の場合はどうであろうか。写真に興味を持って集ったサークルでも、個人個人それに対する意識も異り、皆んなと一緒に行動する事に対する評価も違う学生達が、団結して一つの作品を作り出そうとする時、団結力の欠乏と言う大きな壁にぶち当ってしまう。それを克服して作品の完成に努力しようとする意志が、我クラブだけでなく、全国の写真サークルについて、極めて弱いと言えるようである。あるいは人間の本質的なものに起因するのかも知れない。協力してやるなんて無意味だと言う人もいるかも知れないが、そうした活動の中でこそ人間関係について学び、人生に於ると同じ如き苦しみや喜びを知るのだと思う。

「我々の写真は被写体を視覚で撮っているのではないか、もっと内面を考えること、例えば部活動に於て華やかな姿を視るより、部員の労苦を味う感激等があるはずではないか。」これは論題の意味が非常に難しい様に思う。写真を撮る際、学術用以外は、何か興味が湧いた時である。それに何の非難も無い筈である。被写体を視覚の中だけで捕えても大いに結構である。そしてどんどん写真の量が増す事である。しかし全部の写真がすべてそう言うものであっては、やり方が浅薄であり、上滑りだと非難を受けても仕方のないこと

全日コン最優秀賞

である。自分が本当に打ち込もうとする対象に対しては、その実情を良く知り、時には自ら体験し、それに向けられた感情を最高にして実践に移す。それはあたかも、ぶつかって行くと言う感じでなくてはいけないと思う。学生時代において、サークルの中に居る間に、そのような対象を持つことが是非必要だと思う。そしてその作品完成に努力すべきである。それが成功した時の喜び、失敗した時の苦しみは何物にも替え難いものであり、人生において少くともマイナスにはならないと確信する。我々はあらゆる事を経験するわけにはいかないのだから、一つだけ熱中する対象を持っていたら、それ以外は上滑りでも良いと思う。集中度の高い対象で、結果が組写真の感動的な作品であれば、投機的確率的な前衛写真より一段と高貴な感にうたれる。そういう写真こそもてはやされて然るべきである。

終りに、我々は学生である。だから何事をするにしても「学生らしさ」と言うものが自然に出てくる。たいていの場合、ある種の無気力さを含んだ素朴な学生的な要素がある。強力な団結を基盤にした素晴しい組写真の出現を望みたいものである。学生であることに制約される事なしに、どしどし作品を狙うべきであるが、自己内部に常に精神的葛藤が有って欲しいものである。作品を作る度に精神的矛盾が生れ、その矛盾でまた作品を作る。この繰返しの中で精神的にも技術的にも向上していってもらいたいものであり、また向上していきたいものだ。

沢田　武

（北大カメラクラブ）

曲り角の共同制作

最近、私達学生写真界の内部において、共同制作の停滞、曲り角と良く聞きます。又プロカメラマンの人達も、共同制作に興味を示し始めたようです。その様な時私達学生は、単に十数年の共同制作の歴史を誇るだけでなく、本当に私達の問題を発表出来る方法として、その問題を考え新たなる出発をしなければ、ならないと思います。

今回は、共同制作の問題点と、共同制作の実践との二つを掲載してみる。

組写真、共同制作が停滞していると云ってもそれは、技術的な問題よりむしろその追求に於ける問題点であると思う。そういう事を、写真と云う点から、又はクラブ運営の点から反省し、解決して行かねばならない。同時に組写真、共同制作を発展させる為の種々の方法をも考えなければならない。

組写真は一つの写真形態である

現在の我々は、組写真をいろいろと規制し、一定の枠の中にはめ込んでいる。社会批判にしろ、ルポルタージュにしろ、あるいは精神的なテーマに於ける組写真にしろ、それを表現する時、常に一定のルールを守り、一定の公式に沿って、数枚の主とする写真を俗につなぎと云われる写真でつなぎ、全体のストリーとその主題とする点の盛り上がりを考えに入れ、配置し、表現している。勿論これは重要な事である。我々は、この様な一般的な考え方の基に組写真を知り、それを研究して行く一つの手がかりとしているので、組写真とはそれだけであり、それ以外には成立しないと考えるのは、危険な事である。それこそ組写真を停滞させ、マンネリ化させるものである。組写真を限定し、一定の枠の中にはめ込むのは、逆に組写真の持つ可能性を捨ててしまう事です。我々はその可能性にこそ制作意欲を感じるのである。真に撮って見たいと云う意欲は、テーマの点に於いて、それを自由に表現し得る素地がなければならない。

我々は組写真を、単に構成する複数の連立する写真によって、制作者の主張を、意志を、そして個性を最大限に発揮させる、一つの写真形態であると云う原理的なものとしてとらえるべきです。制作者が自由に、意志と個性を主張すればいいのです。その為には、組写真と云う制作形態の中に、テーマを最大限に表現出来る方法、いわゆる組写の可能性を追求すれば良い。

又我々は組写真を表現だけではなく、鑑賞に於いても当然のごとく規制している。この場合も同様に、組写真と云う規制以外は、それを視る眼は自由でなければならない。各大学に於けるやり方は、無理のないテーマを選び、無理のない方法で撮影し、そして上手に組写真にまとめてしまう。可能性、テーマと云った、真に組写真を追求する事からは逃避的になっている。その大きな原因は、組写真を共同制作と云う形で制作しているのではないだろうか。各大学は、個人個人の自由な創作態度を尊重し、クラブ活動としての意義を、クラブ全体の意志を、個性を、そして主張を、クラブ員全体の共同制作で、組写真なり連作なりを制作し、発表しなければならない。その時、共同制作は学生写真界に大きな意味を持たなくてはならなくなった。それ故共同制作の持つ意義、行う事の困難さを、はっきりと見極わめなければならない。組写真との関連性に於いて、それは特に重要である。停滞しているとはいえ、組写真は今までずっと伸びて来た。が共同制作は昔のままであるばかりか、組写真を発展させる事に逆に作用して来た。我々は共同で組写真を制作すると云う活動を続ける以上、共同制作自体が余裕を持ち、つまり共同制作を完全に把握し、それが組写真にプラスになる様にしなければならない。

個人と集団との問題

芸術とは常に個性的なものであり、制作者の意志の最大限の尊重である。芸術にとって最も恐れなければならないものは、その作品に妥協と云う精神的行為がなされる事である。

勿論写真は、芸術以外のものを含んでいる。写真が芸術であるかどうかと云う事さえ、議論の余地を残し

ている。報道に於ける写真の役割りには、大きなものがあるし、記録に於いてもその機能は、十分に発揮されている。しかし全て創作活動に於いては、制作者の意志や個性や主張は当然表現されていなければならないと思う。

共同制作の問題点は、制作者つまり集団の個性、意志そして主張と、その構成者つまり各個人の個性、意志そして主張を、いかにして統一するかと云う事である。制作者たる集団と構成者たる個人の間には、常になんらかの意見の相異があり、そのままにしておく事は出来ない。制作者と構成者との間に意見の一致があってこそ、始めてその作品に制作者の個性、意志そして主張が表現される。

ほとんどがテーマの追求であるが、我々は次の様な方法で両者の統一を計って来たのだ、その一つは最も無理のない平均的な線で妥協する事であり、もう一つは小数のリーダーなり企画員なりで考えられた意見を、そのまま構成者に説明し、撮影させる事である。しかしこれは最も消極的な方法で、構成者は制作意欲をなくし、テーマは最後まで追求されず、それがそのまま組写真の停滞として現われるのである。

我々は制作者とその構成者の間の溝を埋めるところに、相対立する両者を一致させるところに逆に共同制作の意義を認めなければならないし、又それこそ問題を解決するものである。単にテーマの選定あるいは追求の部分だけに限るものでない。集団の中での個人の問題、人格を有する個人と集団との問題は、クラブ活動の一つの大きな問題でもある。共同制作は写真の制作形態としての意義を持つだけでなく、その様な問題を如何に解決してゆくかと云う意義も持つのである。

「カメラ毎日」新年号に掲載された共同制作「新宿」は、私が今まで書いて来た事とは根本的に違っている。それは各構成者がお互いに干渉する事なく、各構成者の持つ個性で対象を自由に撮影し、それを一組の組写真に組み立ててゆくと云うやり方をとっている。制作者の個性を表現すると云う事ではなく、各構成者の個性を一つの組写真の中に調和させている。その意味でそれは確かに新しい試みで、我々が今までやらなかった試みである。勿論この試みにも問題はある。制作者たる集団にその程度の意味しか見い出せないのかと云う意味に於いて、この試みは創作活動に於ける集団の価値を、厳密に云えば否定している様に思える。しかし我々はここに示された事実から逃げる事は出来ない。我々は全てに貪欲でなければならない。その事実を素直に認め、それを研究し、それが共同制作を高めるものであると思えば、すぐにでも取り入れなければならないと思う。

テーマは問題意識をもつこと

一つのテーマを選ぶ時、そこに多かれ少なかれ何らかの問題意識が働いているのは当然の事である。我々がその問題をどこまで深く堀り下げているか、逆にどこまでも深く堀り下げて見たい意欲に駆られるテーマを選定しているかと云う事には、疑問を感じる。その時「真に我々が意欲を感じる様なテーマが少なくなった」と云う言葉を良く耳にするのであるが、それは本当なのだろうか、誰もが意欲を感じそして最も選びやすい、最も撮りやすいテーマは当然のごとく撮りつくされるであろう。確かに生活は安定して来た。終戦当時のあの荒廃とは全く違っている。パンが欲しい、着物が欲しいそして住むべき家が欲しいと云ったテーマは、訴えたし又簡単に撮れたかも知れない。しかしそれらが満たされた時、我々はもっと純粋に、もっと高度に、生きると云う事を考えるのである。テーマは真に人間的なもの、精神的なものをも捕えなくてはならない。それに日本はまだ貧しい。政治欄にも経済欄にも社会欄にも、不正や歪みがつまっている。我々が問題意識を持ちさえすれば、テーマは幾らでも転っている。我々にとってまず何よりも大切な事は、対象物を適確に探し出す事である。我々はその問題意識を、テーマの追求の面にも現わさねばならない。その対象物の表面だけをなぜまわすのではなく、その中には、いったい何がつまっているのかを見極める事である。その努力こそ大事なのである。この解りきった事こそ必要なのである。

集団の個性を見い出す

共同制作との関連に於いてテーマの追求は、如何にすればいいのであろうか。「新宿」の様な場合に於いては、共同制作との関連性は少なくなるけれども、私は討議を重ね、個人の問題意識を考える事を換起しながら、そこに集団の個性を見い出していく以外に方法がない様な気がする。制作者とその構成者を、一定の時限にまで高めながらしかも統一を計ると云う事である。討議を重ね、時間をかけて解決する事である。安易感こそ危険である。時間をかけると云う事に於いて、我々は時間に追い廻わされて組写真を制作している。組写真の多作は、組写真の乱作に通じる。

クラブ運営に於いて、我々は年間行事を整理し、制作本数を減少させて、出来るかぎり時間をかけて考える。制作意欲はその時湧いてくるのである。組写真を余裕を持って制作する為には、クラブ活動それ自体に余裕を持たさねばならない。

意欲を持たないものには、決して多くを期待出来ない。ファイトを持って組写真、共同制作に当ろうではないか。

井　嶋　丈　典

（甲南大写真部）

曲り角の共同制作

近代化への道を制作する

国土誕生 より

—テーマについて—

我々の慶大カメラクラブが、第11回全日コン共同制作の部に最優秀学校賞を得た「近代化への道」—八郎潟実験農場に見る—は、昨年6月から八郎潟干拓事業に関連して取材した共同制作「国土誕生」の一部を、まとめたものである。又この「近代化への道」は、「国土誕生」と関連して生れてきた、いわば第二のテーマとも云える。従って「近代化への道」について述べる前に、第一テーマの生れてきた状況について考えてみる。

我々がこの「国土誕生」を考えるについて、念頭に置いたことは、現代の高度に発達した文明社会において、自然と人間と云う基本的な関係は、どうなってきているのだろうかと云う事であった。丁度一昨年から昨年にかけて、日本では北陸の地すべり、東京の水飢饉、新潟の大地震等、“自然”の力と云うものが、再び我我の目前に踊り出てきた時期であった。そこで我々は、これまで人間が“天災”と云う言葉に代表される様に、自然の前に屈服してきたわけだが、人間→自然と云う働きかけはないものだろうかと考え、こゝに“干拓”と云う形で自然改造を試み、人間の姿を見つけたわけである。これが第一のテーマの骨組であり、こうして八郎潟干拓を調査し、していく段階で第二のテーマが、そこにおける一つの問題点として指摘され、それが独立したテーマ、即ち変化しつゝある日本農業の一つの方向を示すものとして出てきたわけである。

八郎潟は、東京から約600キロも離れた土地で、このテーマを共同制作するにあたって、「確にテーマ自体は良いが遠過ぎるし、そこまで行かなくても…」と云う意見も出たが、比較的スムーズに決定された。共同制作を行うに当って、テーマと云うものは、我々の生活の周囲にゴロゴロとも云える程、転っているのに、何故我々は八郎潟まで行ったのであろうか。第一には、我々の生活している周囲の問題に麻痺してしまい、何ら新鮮味が湧かず、問題を問題として直視しないと云う傾向が挙げられると思う。又我々の生活の周囲にある問題を、テーマとしてもその問題に対しては、先入観の方が強く働いてしまう。第二に、我々の写真展、特に二校以上の学生合同展に対する考え方からでもある。最近学生写真展、合同展に良いものが生まれないが、今年は自分達の三つの交換合同展にそれぞれ意味を持たせる為に、統一テーマを強く打ち出し、交換合同展の特徴と云うものを生かすことになった。京都の同志社大との同慶展では、場所の違う点から「都市」を統一テーマに、東京都と京都の地域的特徴性を生かした。この展示は場所の広さや枚数に制限された。二番目に早慶展を行い、自然と人間と云う統一テーマをかゝげ、比較的自由に展示が、できた。そこで大事なことは、「調査と撮影に時間をかけ、多人数で広範囲に写真を撮る」を生かした事である。こうして場所の制限を受けないで、八郎潟干拓事業がテーマとして選ばれたわけである。

—共同制作の実践的運営について—

この共同制作運営については、写真展企画準備委員会を作り、3年7人、2年2人がこれを構成し、委員会を中心に6月の中旬、下旬、7月の中旬の3回に渡り現地を調査し、コンテを作成した。

テーマも決まり、いよいよ撮影に入るので、充分な撮影班員を確保する為、テーマの説明会を開き、各学年から撮影参加者を募った。そして7月の下旬、20名からなる合宿撮影を行い、丁度夏期合宿が開かれていたが、終了後、直ちに八郎潟に来る様に計画を立てたので、かなりの人員を確保できた。ついで8月に一回、9月に二回、10月、12月にそれぞれ一回の割合で重点的に撮影を行った。この共同制作はクラブ全員参加のたて前であったが、地理的、金銭的な面において、問題が残った。

コンテについて我々の場合、コンテと云うものが共同制作の意図を各部員に徹底させる為、かなりの比重を持っているし、このコンテの内容はテーマに対する基本的な考察と写真の内容構成からできている。我々の場合、コンテを写真展委員会で作成し、各部員に配布し、そこで全体的な討議を行い、できた問題点を委員会で再び討議し、コンテの修正を行うと云う様に、コンテの内容は本来変化していく事を意図としているが、どうしても固定的になり、最初のまゝで押し通すと云う事がしばしばある。こうした状態から出発した各部員の撮影態度は、共同制作と云うものへの参加の仕方と云う点から、多くの問題点を含んでいるのではないであろうか。

—全日コン「近代化への道」の制作について—

八郎潟干拓事業を調査、撮影していくうちに、日本の農業問題と云う事が、クローズアップされてきた。八郎潟干拓自体、その計画の当初は単に食糧増産を意図したに過ぎなかったのですが、日本農業が一つの転換点に、立たされている現在、日本農業の明日への姿を作り出そうと云う目的に変更されて来たのである。我々が初め意図した、八郎潟干拓に見る自然改造の後に何ができるのかと云う事を、アピールさせる為、将来中央干拓地における農業の方向を、実験している周辺干拓地に作られた八郎潟実験農場の「収穫」を中心に、「近代化への道」をまとめたのである。

—この制作で感じた事—

これらの共同制作「国土誕生」「近代化への道」によって、我々は一つの相対的な評価を受けたわけであり、一応の満足感は得たもの、、自分達が一つの大きな弱味を持っていたと云う事も、同時に感じないではいられない。それは我々の場合にも共同制作にあたって、テーマが最初に出てきたのではなく、写真展と云うものが最初に出てきたと云う事であった。“写真展があるから、何かを…”と云う意識がそこに存在していたのだと思う。この他にも、部員の参加状態、参加のさせ方、及び金銭的等にも大きな問題がある。

近代化への道 より

金井三喜雄

慶大カメラクラブ

１９６５年度

■ 全日本学生写真連盟代表委員総会概括／報告

日時　３月24日午後５時より
　　３月27日午前11時まで
場所　東京　市ヶ谷旅館

総会第一日目は、議長団を選出し、各地区連盟代表委員の承認と、全日本部代表委員の承認を行った。そして本部代表委員会より、'64年度の諸般事務報告・一般報告・'65年度の方針が提出された。

続いて、第二日目は、本部委員会より提出された報告ならび、方針についての質疑、応答、討論が行なわれた。

全日コン

本年度で第12回目を迎えるこの私達のコンテストが最近低調になっているとの声が、全員の中にあるので、これについて検討した。つまり低調といわれる因は、まず計数的にみて、応募点数は、２万点余ではあるが、これを応募者数にすれば、約７千人である。ところがこのコンテストの応募者資格は、会員以外のものでも参加できるのであるから、本連盟会員３万5千余名(37年度調査）からみれば、会員の作品は非常に少ないのではないかということである。又、大学生の作品が高校生や、小中学生の作品にくらべて、総体的には、ひどく質的に低下しているということ等である。全日コンの意義を中心に話し合った。

北海道：全日コンを学生写真と学生写真人口の増すアピールとしなければならない。

東　北：このコンクールの意義は写真向上を目指すことにある。

関　東：今までの全日コンには魅力がないので、できるだけ一人一人に全日コンの意義を話したい。

中　部：今までを全て白紙に戻し、第一回の時の様な純粋な気持でこのコンクールをやらねばならない。

関　西：全日コンは、一種の全日のアピールだが、このコンクールによって写真意欲をかり立てることは確かだし、学生の考え方を一般社会に発表するため必要なものである。

中　国：学生写真界の向上、発展に寄与すると云う主旨には賛成であるが、方法に問題がある。

四　国：連盟のアピールをするのにも良いし、なにより全国的価値がある。

九　州：我々の地区は全日コンを最大の目標として、アピールは一面にすぎない。

結局、全日コンは絶対に必要だから、今までのあり方を反省し、このコンクールの意義を全員一人一人が良く考えて、一年間の自分の写真を発表する場にしなければならないとの結論に達した。

会報については、すでに51号を発行している。全日の歴史を目で見るものとして、あるいは学生写真界の歴史を語るものとして、そして会員同志を結ぶ機関紙として役割を果して来たのだが、昨年度は１冊しか発行できなかったことを反省し、今年度は編集・レイアウトを学生の手で行ない、各地区に会報委員、モニター校を設置し、会員の声を聞き、会員のページを増し、会員の為の会報としていかなければならないとの意見だった。52号以後は、その様な意図の下に発行してゆくことを確認した。

キャンペーンに対しては、全日の組織をＰＲする親睦を目的とするのでなく、又、学生写真界に広がっている停滞ムードを打破し、学生の正しい目で実質的なキャンペーンを行なう段階に入らなければならないとの意見で一致した。

なお、会報とキャンペーンについては新しく規約がもうけられた。

教育問題のキャンペーンは、５月いっぱいで撮影を終り、10月に東京富士フォトサロンを始めとして、全国に展示する予定である。

1965年度　全日本学生写真連盟委員

全日本部	会長			
	委員長	三崎　徹	（明治大学）	東京都町田市南大谷
	代表委員	北川尊久	（工学院大学）	〃　武蔵野市吉祥寺東町
	〃	小松久信	（日本大学）	〃　文京区駒込富士前町
北海道	委員長	高橋福一	（北海学園大学）	札幌市南4条東
	代表委員	山田克昌	（北海道大学）	〃　南21条西
	〃	庄野俊明	（酪農学園大学）	江別市酪農学園大学 創世寮内
東北	委員長	多木和夫	（東北大学）	仙台市長町長嶺
	代表委員	吉田健一	（東北学園大学）	〃　東二番丁
	〃	石川百合子	（宮城学院大学）	〃　原田小田原山本
関東	委員長	藤本優成	（中央大学）	横浜市鶴見区下末吉町
	代表委員	岡部雄太郎	（青山学院大学）	東京都文京区駒込千駄本町
	〃	永井淳子	（大妻女子大学）	埼玉県浦和市高砂町
中部	委員長	白木俊勝	（中京大学）	岐阜市長良天神町
	代表委員	長谷川亀夫	（愛知大学）	名古屋市港区栄町
	〃	高岡秀暢	（名古屋大学）	〃　昭和天白町野並
関西	委員長	戸谷安広	（関西大学）	大阪市生野区猪飼野西
	代表委員	斉藤孝一	（大阪商業大学）	〃　南区南空堀町
	〃	富岡昭夫	（関西学院大学）	大阪府河内市吉田
中国	委員長	妹尾　孚	（岡山大学）	岡山県浅口郡里庄町里見
	代表委員	横佩俊成	（広島大学）	広島県安芸郡海田町県営住宅
	〃	川手陽介	（岡山大学）	岡山県浅口郡金光町上竹
四国	委員長	平木一信	（香川大学）	香川県高松市生島町
	代表委員	奥田節雄	（　〃　）	〃　宮脇町
	〃	田中隆弘	（徳島大学）	〃　徳島市下町本
九州	委員長	加藤　勉	（福岡大学）	福岡市三宅南大橋
	代表委員	児玉勝克	（九州歯科大）	北九州市門司区日の出町
	〃	安武　斉	（西南学院大）	福岡県粕屋郡志免町大正町

以上全日総会で承認されました。

投　稿　歓　迎

53号〆切　7月31日

次号より、会報の充実のため投稿欄を設けます。連盟、写真展、写真界等の疑問、反論を誌上匿名でもかまいませんので、お寄せ下さい。

送り先は、下記の関東会報委員までお願いします。

表　紙

全日コン・組写真 11枚

銀賞・努力賞

山の子供たちょり

清　水　泰　子　(早大)

昭和40年度　各地区会報委員

北海道	薄田節子	(藤女子短期大)	札幌市南5条西
東北	石川百合子	(宮城学院大)	仙台市原町小田原山本丁
関東	田辺文昭	(工学院大)	東京都文京区林町
	大村悦子	(明治大)	東京都板橋区永川町
	桜井寿子	(実践女子大)	東京都品川区大井
	女子美術大学		
	山田　隆	(中大附高)	東京都杉並区本天沼
中部	長谷川亀夫	(愛知大)	名古屋市港区港栄町
関西	斉藤考一	(大阪商大)	大阪市南区南空堀町
	中田博行	(大阪高)	大阪市大淀区大淀町中
四国	安松登志雄	(香川大)	香川県大川郡長尾町長尾
中国	山本英基	(広島大)	広島市南千田町
九州	田原迫要	(九州大)	福岡市香稚御幸町
	樋口　宏	(九州歯科大)	福岡市西公園
	西村二郎	(修獣館高)	福岡市下長尾
	長与寛治	(福岡高)	福岡市六本松

編集後記

高校生一人一人の考えが、しっかりしていなければ何も出来ないこと―そんなことは誰れにでも判っていることでしょう　でもそんな単純な事柄を、いつも忘れて生活しています。

全日でもやはり同じことが永く行なわれて来ています。各写真部でも、そうだった。どうしたらこのことを自覚して活動できるか。それが、今日の大きな中心となる課題です。

全国の高校・大学の新人写真部員の一人一人が自分の立場を良く考え、部員であると共に全日会員でもあると云う事を自覚してもらいたい。

全日本学生写真連盟会報　第52号

昭和40年4月20日　印刷
昭和40年4月25日　発行

編集　全日本学生写真連盟会報委員会
代表者　北川尊久

発行人　全日本学生写真連盟委員長
三崎　徹

発行所　東京都中央区銀座西2の3
富士写真フイルム株式会社

印刷所　東京都中央区新富町3の1
有限会社　親和印刷

禁転載

子供二態